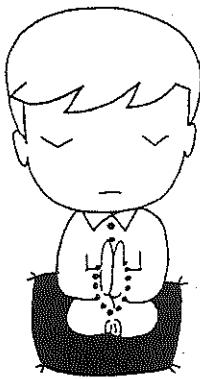


次にきりかえの宗教とは、ただに神さまや仏さまの「利益をいのるのではなく、ひたすらに神さまや仏さまを信仰し、その心に従つてゆく」とにより、今までの自分がもつていた願望や欲望の思いをくいあらため、その心をきりかえて生きることを教えるものを感じます。人間の願望というものは、いつも自分自身を中心として生まれ、ふくらんでゆくものです。なかなか自分を捨てて他人のための願いにはなりません。たとえ世のため、人のためといつたところで、その願いの底には、なお自分中心の我執の心が深く宿つていています。人間の願望や欲望を思う時、それを否定できません。私自身についても、自分の心に生まれてくる願望、欲望を思う時、それらの多くが、またしても我執に閉ざされてしまうことがあります。そしてまた、人間の願望、欲望というものは、「」と「」とに限りなく肥大し、ぼうちようしてとどまるところを知りません。私たちの願いには終局がありません。このように自分中心の、そしてまたはではなく肥大する願望、欲望のままに生きてゆく限り、人生の嘗みは、やがてその限界に出会い、はたんすることは明らかです。人の世のさだめは、いつもきびしく思うにまかせぬものであります。

そこでその願望や欲望の充足を神さまや仏さまにいのり、その「利益をまつのではなく、それとは逆に、そういう自分の願望や欲望が、いつも自分中心であり、はてしなく肥大してゆく」とをふりかえり、神さまや仏さまを信仰し、その心に従うことによって、今までの自分の心をきりかえ、思いをあらためて生きてゆこうというのです。すなわち、つねにこの世を超えた神さまや仏さまの心を学び、それに従つて、自分の心を制御し、修正しつ



つ生きてゆく」とあります。たとえ病氣に倒れて苦しもうとも、また人生につまずいて泣こうとも、なおそこに神さまの意志を思い、よくそれを受けとめ、よくそれに耐えて、苦しみや悲しみを乗り越えてゆこうとするものであります。ここにきりかえの宗教の主張があります。

このような心のきりかえを語る宗教は、私たちの人生生活において、それなりの意味を持つていると思われます。しかしながら、それについての大きな問題は、そのような神さまや仏さまの意志の存在をすなおに認め、私達がいつに考へてしまひ、そこから自分の人生をすぐ結論付けてしまうのです。しかし、人生の出来事は、幸福であれ不幸であれ、それらのすべてが、神さまや仏さまの意志によつて支配され、生起してくると思えるか、それらのすべてが、神さまや仏さまの意志に影響をうけ、生起してくると思えるか、ということです。もしたとえ、そのことを認めるとしても、「」ではつねに日常生活における心のもちかたの転換を語るものであつて、いやしくおろかな願いであることをはずかしく思つ」とです。そしてまた、人間の願望、欲望といふものは、「」と「」とに限りなく肥大し、ぼうちようしてとどまるところを知りません。私たちの願いには終局がありません。このように自分中心の、そしてまたはではなく肥大する願望、欲望のままに生きてゆく限り、人生の嘗みは、やがてその限界に出会い、はたんすることは明らかです。人の世のさだめは、いつもきびしく思うにまかせぬものであります。

そこでその願望や欲望の充足を神さまや仏さまにいのり、その「利益をまつのではなく、それとは逆に、そういう自分の願望や欲望が、いつも自分中心であり、はてしなく肥大してゆく」とをふりかえり、神さまや仏さまを信仰し、その心をきりかえ、思いをあらためて生きてゆこうというのです。すなわち、つねにこの世を超えた神さまや仏さまの心を学び、それに従つて、自分の心を制御し、修正しつ

老いが、病が、死が

二階堂 行邦

私の生を問いかけている

とすん

量販店で見つけて買ったステイク糊十本の塊をほつこりと見ていた
ら、若院が「そんなよ一けの糊、何に使うん?」と尋ねます。「寺報の封

勝林寺 0796-52-3083 緊急時 090-3708-5424

今月のことばは、真宗大谷派僧侶の二階堂行邦先生のお言葉です。「生・老・病・死」という人生苦を、私だけの体験として固執し、私だけが災難に遭つたように考へてしまひ、そこから自分の人生をすぐ結論付けてしまうのです。しかし、人生の人生の出来事は、幸福であれ不幸であれ、それらのすべてが、神さまや仏さまの意志によつて支配され、生起してくると思えるか、それらのすべてが、神さまや仏さまの意志に影響をうけ、生起してくると思えるか、ということです。もしたとえ、そのことを認めるとしても、「」ではつねに日常生活における心のもちかたの転換を語るものであつて、いやしくおろかな願いであることをはずかしく思つ」とです。それで苦悩する。それが人間なん

それはあくまで「心がけ主義」を教えるものでしかありません。そこでは私たちの人生

の矛盾といふものについては、あまりられて

いません。それはなお心の浅い生き方と

分中心の我執の心や、それによる生きること

の矛盾といふものについては、あまりされて

いません。それはなお心の浅い生き方と

分中心の我